

メールレター(14)

春よ来い、はーやく来い♪♪♪

サマータイムになりました。カレンダーだけが勝手につっぱしり、不機嫌そうに時折降る雪。生命を感じないモノトニーの冬が居残り、春は遠そうです。バンクーバーはそろそろ春の兆しとか。カナダの東と西の気候の差を思うたび、国の広さを感じます。ケベック州だけでも日本の5倍、カナダ全体は日本の25倍です。ブリティッシュコロンビア州ビクトリアからニューファンドランドまで横断すれば5,500キロメートルです。風光明媚なビクトリア市に、「ここからカナダが始まる。マイルゼロ」と書いた石碑があったのを思い出します。

娘の茜は、こんな冬もなんのその、両家の顔合わせや初秋の結婚式を控え、ひとり幸せの花が咲いているようです。長い人生、こんな時があっても良いかなあと微笑みたくなります。ドリトル先生は、痛さも限界に達したのか、4月半ばに人工股関節の手術を受けることになりました。人工股関節は、ハイテクとなり今やセラミックを使うようです。高齢化を迎えた昨今は、人工股関節の手術の需要はうなぎ登りだそうです。ドリトル先生もご多分漏れず、それに該当するようです。手術時間は約1時間半ほどだそうです。ドリトル先生の合意を得て、研究対象となり、選抜された150人の患者の一人として手術を受け、その前後の状況を報告するようです。

「そうなんだ、貴方はモルモットなんだ。」

「そうではない。僕がモルモットに見えるか？試験的なものではなく、情報を提供して医学の向上に貢献するのだ。」

何と言っても、今やまな板の上の鯉。ぐずぐず言われてられません。

早朝病院に入り、検査や麻酔を受け、手術後、しばらく様子を見て、夕方には帰宅するようです。医学の発展は目覚ましく、その高性能な技術には驚かされます。医者には、一度診療で会っただけで、その後、特に打ち合わせの面接もなく、突然、手術になるようです。入院なしなので、経費の節約もいかばかりかと、猜疑心が働きます。

あまり良い話のない、こんな冬の終わりには、聞き伝えの一鉢の花の話しが思い出されます。だいぶ前になりますが、ケベック州のある町にアメリカのある著名な臨床心医が招かれ講演会をしました。講演会は拍手喝采のうちに終わりました。講演会の後、若者がやってきて、

「お願いがあります。叔母の所に一緒にいてくれませんか。叔父が亡くなって以来、叔母は、カーテンを閉め切ったまま、家から一歩も出ようとしないのです。もう2年になります。一言声をかけて元気ずけてくれませんか。」

臨床心医が彼と訪ねてみると、家は真っ暗。一筋の光も差し込みません。家の中を叔母さんの話を聞きながら一回りすると、ある場所でぴったり止まり、おばさんに微笑みかけるとこう言ったのです。

「ここはあなたの命なのですね。貴方はお一人ではなかったのですね。」

光輝き、花の咲き乱れる温室が目の前にありました。そこにあった三色すみれの一鉢をとると、

「この花を、誰かにお祝いに送ってあげてください。友達でも、親戚でもとなりの人でも、誰でも良いのです。お祝いごとや良いことがあったら、この幸せの三色すみれの一鉢を送ってあげてください。あなたの素晴らしい花の世界を分けてあげてください。」

叔母さんは忙しくなりました。カーテンは開けられ、光が家を満たすようになりました。

この叔母さんは、どこかで子供が生まれたと聞いたら一鉢、結婚したと聞いたら一鉢、お誕生日と聞いたら一鉢、良いことを聞くたびにどんな遠くまででも、誰にでも一鉢の三色すみれの花を死ぬまで贈り続けたのでした。なくなった時には2万人もの人が参列したそうです。

こんな話もカナダにはありますよ。